

太平洋を渡った南房総のアワビ漁師たち ～ アメリカはこの先に…！

山口 正明 (NPO 法人安房文化遺産フォーラム 理事)

はじめに

房州地方の伝統的な特産品であるアワビは、奈良時代 722 (養老 6) 年、平城京に税として送られた歴史を持つ。2007 (平成 19) 年、千葉ブランド水産物に“房州黒アワビ”が認定された。申請者は共同で、白浜町、房州ちくら、和田町の各漁業協同組合。千葉ブランドの認定には千葉県を代表し、全国に誇れる優良な水産物であることが求められる。房州はアワビの特産地。

幕末から明治へと時代が大きく変わり、生きて戻れる保証もないアメリカへ太平洋を渡った漁師たちがいた。地元で特産のアワビを採っていても十分に暮らしていたのに、何が彼らを新天地へと導いたのか。

小谷源之助・仲治郎兄弟の渡米

根本 (南房総市白浜町) の海産物問屋「金澤屋」の長男・小谷源之助は、慶應義塾幼稚舎や商法学校で学んだ後、家業の手伝いで新潟県佐渡や秋田県能代など各地を回り、アワビ事業を行っていた。1897 (明治 30) 年 9 月、渡航目的に水産業調査と記された旅券を手にも、源之助 (30 歳) はアメリカへ渡った。

同年 12 月、弟の小谷仲治郎 (25 歳) は千田 (南房総市千倉町) の男海士^{あま}の安田大助 (41 歳)、安田市之助 (41 歳)、山本林治 (39 歳) とともに渡米した。仲治郎の渡航目的は漁業製造監督、3 名は漁業と記されていた。

仲治郎は結婚 4 年目で、長男義雄はまだ 1 歳、妻美わは二男徹^{てつ}を身ごもっていた。その頃、安房の外房沿岸では、アワビの餌となる海藻が生えなくなる磯焼けが発生し、不漁が続いていた。同年には千田で大火があり、仲治郎の自宅も全焼した。妻子を養わなくてはならない逼迫した状況の中で、なぜアメリカへ渡ったのか。

仲治郎は、水産伝習所 (後の東京水産大学・東京海洋大学) の第 3 回卒業生。水産伝習所を設立し所長を務めていた関澤^{あけきよ}明清は、ウィーンやフィラデルフィアの万博へ出展する農商務省の事務官であった。日本の水産業の黎明期にサケ・マスの人工孵化や漁業方法の改良に努め、捕鯨銃の導入により日本人で初めて近代捕鯨に成功した水産界のパイオニアでもある。

水産伝習所は水産教育の最高水準の学校であったが、日本の水産業界にはまだ卒業生を受け入れるだけの職場がなかった。1891 (明治 24) 年に仲治郎は水産伝習所を卒業したが、その翌年、農商務省を退官した関澤は、館山町 (現館山市) に転居して、関澤水産製造所を設立。卒業生の受け皿となるべく近代捕鯨や遠洋漁業を始めた。

器械式潜水によるアワビ漁の幕開け

1878 (明治 11) 年 4 月から 7 月にかけて、根本では器械式潜水法によるアワビ漁の試験操業が日本で初めて行われた。その時の出資者のひとりが森惣右衛門であり、その弟は、後に根本の金澤屋に婿入りする小谷清三郎である。この試験操業を成功に導いた増田萬吉は、開港間もない横浜において、日本で初めて民間による器械式潜水事業を起こした人物である。彼は英語に堪能で、商業英語辞典を編纂する力量を持っていた。

この年の大成功を契機に、器械式潜水漁法は瞬く間に日本各地に広まった。増田はハワイへの官約移民より 2 年早く、1883 (明治 16) 年に日本政府の許可を得て、オーストラリアの木曜島に真珠貝採取のため、37 人の日本人ダイバーを派遣した。この集団派遣を機に、和歌山県人による木曜島への本格的な渡航が始まった。

1890(明治23)年に親善使節団として来日したトルコ軍艦「エルトゥール号」が、和歌山県南の紀伊大島沖で遭難した。その際、増田は率先して遭難者や船体引き揚げに協力し、トルコ政府から多大な褒賞金を授与された。

増田の没後、顕彰碑建立の動きがあり、根本地区で趣意書が見つまっている。進取の気鋭を持った増田萬吉の来村は、小谷清三郎にも未知の世界を開かせ、後に源之助や仲治郎ら子どもたちに高等教育を与えるきっかけになったと考えられる。

困難に立ち向かう

仲治郎と一緒に渡米した3人の男海士は、ポイントロボスで素潜りのアワビ漁を行った。しかし次第に漁場が沖合になるにつれ、もぐり襦袢1枚では長時間の潜水が難しくなった。房総沖の黒潮は、7月において海水温24℃の暖流。モンレー沖のカリフォルニア海流は、7月の海水温15℃の寒流であった。小谷兄弟は根本での漁法を思い出し、素潜りから器械式潜水漁法に変えることとした。

1898(明治31)年9月、栗原石松(46歳)、山口次郎松(41歳)、早川千之助(34歳)ら3人のアワビダイバーが渡米し、機械式潜水のアワビ漁を始めた。その頃、すでに日本人排斥の兆候は出始めていた。1900(明治33)年頃、カリフォルニア州議会やモンレー郡議会で、日本人のアワビ漁業禁止法案が提出されそうになったことがあるが、小谷兄弟の尽力により法案提出は見送られた。しかし、翌年には漁獲アワビの大きさ規制が行われ、乾鮑への影響が出て収益は思うように上がらなかった。

協力者現われる

小谷兄弟は、鉾山技師であり建築士であったA・M・アーレンの協力を得ることになり、1902(明治35)年には共同でポイントロボス缶詰会社を設立した。アメリカ人の味覚に合うように

缶詰に加工して販売することになった。

それに呼応するかのようになり、ドイツ人ポップ・アーネストは1906(明治39)年、モンレーにレストランを開業。彼は、アワビ肉を柔らかくすることを発見した。1915(大正4)年には、パナマ太平洋国際博覧会開催中にサンフランシスコでアワビステーキを紹介。博覧会を機にアワビ料理はサンフランシスコに定着していった。

1917(大正6)年には第一次世界大戦の反ドイツ感情のため、サンフランシスコからモンレーに戻り、アワビダイバーから提供された新鮮なアワビを氷詰めにして、サンフランシスコへ送る努力を続けた。そして、当時の牛肉不足も相まってアワビステーキはますますアメリカ人の食卓に普及していった。

ちなみに現在、日本の英和辞典で abalone(アワビ)の説明には「日本では刺身で食べることが多いが、西洋、特にアメリカの太平洋側では通例ステーキにして食べる」と紹介されている。後に辞典に載るほどアメリカ人社会にアワビ料理を浸透させた事跡は、小谷兄弟らの功績の一つとあってよい。ポイントロボス缶詰会社のアワビ取扱量は、カリフォルニア州の市場で最大75%を占めるまでに成長した。

小谷仲治郎の帰国

1905(明治38)年2月、サンフランシスコの新聞紙上で反日キャンペーンが行われ、同年5月にはサンフランシスコでアジア人排斥同盟が結成された。その後、1907(明治40)年2月には、ハワイ等からの日本人の転航移民が禁止され、翌年3月には日米紳士協約で日本人移民が制限されたのであった。

日本から、交代のアワビダイバーたちが渡米しづらくなることを察知した仲治郎は、1906(明治39)年11月、9年間暮らしたアメリカを後に、帰国した。仲治郎は、日本にいて缶詰会社の共同経営者として、アワビダイバーの

渡米許可を日本政府に要請した。アメリカ側では、源之助やアーレンらが奔走してアメリカ政府に要請したと想定される。そして、一時的な滞在を条件に少人数のアワビダイバーたちの入国が特別に許可されたと考えられる。

終焉間近

その後も、漁獲アワビの大きさ規制は強化され、乾鮑製造も禁止されていった。1930（昭和5）年にA・M・アーレンと源之助が続けて亡くなると、翌年にはポイントロボス缶詰会社は閉鎖された。しかし、その後も源之助の三男セイゾーやアーレンの義理の息子であったジュリアン・バーネットによりアワビ事業は継続した。

そして日米開戦の翌1942（昭和17）年、アメリカ大統領行政命令第9066号により日系人の強制立ち退きが行われ、日本人によるアワビ事業は完全に消滅したのである。

ポイントロボスに來訪した著名人

現在、サンフランシスコとモントレイの間は、

車で約3時間（約190km）の距離である。モントレイ市内からポイントロボスまで、車で約20分。サンフランシスコからポイントロボスまで、決して近いとは言えないが、当時、日本の皇族や政治家、芸術家らがたびたびポイントロボスを訪れていた。

1925（大正14）年11月に朝香宮夫妻、1931（昭和6）年5月には高松宮夫妻が世界一周新婚旅行の帰途に立ち寄った。

そして同年9月に衆議院議員の尾崎行雄が2人の娘品江・雪香とともに小谷宅を訪問した。尾崎は、ニューヨークのカーネギー財団からの講演要請に応じて渡米したが、サンディエゴのラ・ホヤで療養中であった妻テオドラの見舞いを兼ねて、日系人排斥の実情を把握するためにカリフォルニア州の各地を視察していた。

竹久夢二は関東大震災以降、人気に陰りがみえたが、再起をかけて渡欧する足がかりとしてアメリカに来ていた。そこで世話になったのがコダニ・ゲストハウスであった。奇しくも尾崎行雄らと記念写真に収まることとなる。



1931（昭和6）年9月15日 ゲストハウス前の記念撮影。前列に故小谷源之助の妻ふくと四男ユージン、中央の着帽が尾崎行雄、その後ろが竹久夢二、その右側に三男セイゾー。 安房文化遺産フォーラム提供

それぞれのお墓

1930（昭和5）年に源之助は亡くなった。モントレー日本人会の建物の前で撮影した葬儀のパノラマ写真が今も残っている。逝去の翌年、竹久夢二がスケッチした源之助の墓は、自立型で、「小谷源之助」と漢字で縦書きにされている。しかし現在、霊園にある源之助・ふくの墓は四角く平らな墓石であり、スケッチとは異なる。子孫や歴史家に聞いても分からないと言う。もしかしたら、戦争中に撤去されたのかもしれない。

同年、ビジネスパートナーだったA・M・アーレンが亡くなると、仲治郎は千田の長性寺で追悼法要をした。先に亡くなったアーレンの妻サティの法要も同寺で行っている。単なる共同経営者というよりも、家族以上の信頼関係を培っていたと感じられる。

また、南房総市白浜町の根本東墓地にある小谷家の墓石には、陶器でできた清三郎・たよ夫妻の写真が埋め込まれている。仲治郎がサンフランシスコの業者に発注して作ったといわれ



竹久夢二がスケッチした源之助の墓碑
1931（昭和6）年

出典『夢二の見たアメリカ』鶴谷壽



1907（明治40）年 千田の長性寺にてA・M・アーレン妻（サティ）の追悼法要。前列左は仲治郎。NPO 安房文化遺産フォーラム提供

ている。清三郎の写真にヒビが入っているのは、戦争中に子ども達が石ころをぶつけて壊したという。落下した欠片を貼り付けて直したといわれるが、戦争が子ども達に与えた悲劇である。

交流復活のきざし

1994（平成6）年8月、ポイントロボスで式典が行われた。モントレー半島の日本人移住100周年を記念する行事の一つであった。その席上、小谷源之助の米国への貢献を認めて、ポイントロボスの州立自然保護区内の住居跡地を「コダニ・ビレッジ」として公式に命名した。

戦後60年を記念して、2005（平成17）年9月、モントレーからの市民団が館山市を訪れた。戦争によって途絶えた交流が、戦後60年を機に復活したのだ。2007（平成19）年には、源之助の四男ユージンとその娘キミらが来日し、父のふるさと根本を訪ねた。その歓迎セレモニーには、1897（明治30）年当時の関係者の子孫たちが100年を越えて一堂に会した。すなわち、源之助の息子と孫、仲治郎の孫、野田音三郎の孫、増田萬吉の孫たちであった。

現代に生きる我々としては、温故知新のごとく太平洋のかけ橋となった人々の功績を顕彰し、それを地域に活かし、後世に伝えていくことが責務であると思っている。



1930（昭和5）年 千田の長性寺にてA・M・アーレンの追悼法要。前列右は仲治郎。安田正行氏所蔵